

護城山碑文に見る字喃について

清水政明*・Lê Thị Liên**・桃木至朗***

Chữ Nôm Characters Contained in the Inscription of Hộ Thành Mountain

Masaaki SHIMIZU*, Lê Thị Liên**, and Shiro MOMOKI***

This paper aims to introduce one piece of *chữ nôm* material, which Henri Maspéro mentioned in his article of 1912 as one of the oldest *chữ nôm* materials, and the existence of which remained for a long time unconfirmed. This paper also aims to analyze the *chữ nôm* characters contained in it from the historical phonological point of view.

This material was rediscovered and introduced by Lê Thị Liên in her 1989 B. A. thesis. It is an inscription erected in 1343 on the Hộ Thành mountain (núi Non Nước) in the present Ninh Bình province, Vietnam. It concerns donations made by local inhabitants for the construction of a temple on the mountain.

Before analyzing the *chữ nôm* characters in the inscription, we first review the traditional method of analyzing *chữ nôm* characters as proposed by Henri Maspéro in 1912, for the purpose of demonstrating the limitations of his method in the analysis of our material. We then refer to recent Viet-Muong phonological studies based on the newly discovered and described groups of the Viet-Muong branch such as Arem, Chút, Mã Liềng, Aheu, and Pong, most of which were not known when Maspéro wrote his paper. One of the main phonological features that differentiate them from the Mường dialects described by Maspéro is the existence of the disyllabic structure: (C₀)vC₁V(C₂)/T. We also utilize newly discovered *chữ nôm* materials such as the Sino-Vietnamese text of *Phật thuyết đại báo phụ mẫu ân trọng kinh*, compiled in the 15th century, which also throws light on our analysis.

The material contains 11 common words and 18 person or place names written in *chữ nôm* characters. The latter 18 proper nouns are the object of discussion. Their common characteristics are the use of two characters for the transcription of one proper noun and occurrence of the vowel /a/ as the first element. We claim for these examples to show (1) certain patterns of the initial consonantal cluster, and (2) the trace of the disyllabic morphemes still preserved in the 14th century Vietnamese. Concerning the former point, we can reconstruct such patterns as /*bl-/ , /*ml-/ , and /*k'r-/ from our material. The latter point is of special importance. Nguyễn Tài Căn (1995) reconstructed the major members of the minor syllable ((C₀)v) in the disyllabic structure of Proto Viet-Muong as /*pə/, /*tə/, /*cə/, /*kə/, /*sə/, /*a/, and we can recognize four of them in our material: /*pə/, /*tə/, /*kə/, /*a/. The *chữ nôm* characters contained in the Sino-Vietnamese text of *Phật thuyết đại báo phụ mẫu ân trọng kinh* mentioned above, in turn, show all six of them, and the characters transcribing each of these minor syllables coincide with each other between these two materials, a fact that may reinforce the credibility of our analysis.

* 京都大学大学院人間・環境学研究科；Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan

** ベトナム考古学院；Institute of Archaeology, 61 Phan Chu Trinh, Hanoi, Vietnam

*** 大阪大学大学院文学研究科；Graduate School of Letters, Osaka University, 1-5 Machikaneyama-cho, Osaka 560-8532, Japan

In conclusion, the insertion of a non-distinctive schwa vowel /ə/ between each of the initial consonantal clusters seems to have been common in Vietnamese during the 14th-15th centuries, but not in all cases. And the disyllabic structure of Vietnamese, or at least the trace of it, is recognized to have existed until as late as 15th century.

は じ め に

1989年1月、ハノイ大学(現ハノイ国家大学人文・社会科学部)歴史学部考古学専攻の学生たちは、Trần Quốc Vương 教授の指導下に、Hà Nam Ninh (現 Ninh Bình) 省の Ninh Bình 市、古都 Hoa Lư 一帯の調査を行った。このとき Lê Thị Liên (以下、Liên と略す) は、Ninh Bình 市内の Non Nước 山で陳朝期(1225-1400)の磨崖碑文8基を発見または再発見し拓本を持ち帰った。同年夏に提出した卒業論文で Liên は、これらの碑文の現代ベトナム語訳注と、碑文に含まれる情報の種類の初歩的考察を行った。¹⁾

卒業後、ハノイでベトナム考古学院に勤務した Liên は仏教美術など別のテーマでの研究に従事したため、碑文研究を進めることができなかった。いっぽうベトナム中世史を専門とする桃木は、1997年8月にハノイの漢喃研究院 Viện Nghiên cứu Hán Nôm などでは碑文拓本を中心とする陳朝期社会経済史料の閲覧・収集を行った。その途中、考古学院の Trịnh Cao Tường 氏から Liên が Non Nước 山碑文の拓本多数を所蔵することを聞き、8月20日と25日の2回にわたって考古学院で面接した。桃木の帰国間際ですべての拓本を写す時間的余裕はなかったが、Liên の卒業論文のコピーを提供されたほか、本稿で紹介する紹豊3年寄進碑文拓本の筆写と写真撮影を許され、それらを日本に持ち帰った。

この碑文は、フランスの Henri Maspéro が有名なベトナム語音韻史研究のなかで [Maspéro 1912: 7, 注1], 「護城山碑文」の名で初期 chũ' nôm 史料としてつとに言及したものだが、全文も山中での正確な所在地も公表されなかったため、その後ずっと幻の碑文となっていたものであり、桃木は帰国後、この碑文の公表を考えた。内容は仏寺への寄進の碑文であり、社会経済史料として意義をもつが、桃木は Liên のほか、音韻史および chũ' nôm 史料の専門家である清水にも相談、本稿のような形で字喃に力点をおいた紹介をすることとした。

本稿は、Liên の卒業論文を参照しながら、序文と I を桃木、本文の断句と訳注、III 以降の考察は清水(訳注の歴史関係の項目の一部は桃木)が草稿を作成、その後3人で検討して成稿にこぎつけたものである。

1) 調査簡報は Lê Thị Liên [1990]。また80年代に発見された14世紀以前の碑文については Ha Van Tan [1991] が紹介する。

I Non Nước 山と護城山碑文

Non Nước 山は、ベトナム北部、紅河デルタの西南隅にあり、現在の Ninh Bình 省都 Ninh Bình 市の北側で Vân Sàng 河が Đáy 河に流れ込む地点に面した、河原からの高さが 40m ほどの石灰岩の小丘である。Nam Định 方面から国道 10 号を利用して Ninh Bình 市に入ると、Đáy 河を渡った直後にこの山の下を通ることになる。現在の Đáy 河口は 20km ほど先だが、紅河デルタの南方への出口として陳朝期までの文献に頻出する神符海口はすぐ近くにあったと考えられ、北部ベトナム国家が 10 世紀に独立した当初に華閩 Hoa Lu' (李朝 <1009-1225> 以降は長安) に首都が置かれた時期 (966? -1010) に限らず、Non Nước 山は重要な戦略的位置を占めつづけたに違いない。

デルタ内の残丘はしばしば、軍事拠点たりうるだけでなく頂上からの眺望が愛される景勝の地となり、山内には寺社が建設される。Non Nước 山には Liền が研究した陳朝期碑文 (表 1) 以外にも、黎朝 (1428-1789) 以降の文人や皇帝がここに遊んだ記念など、全部で 30 基以上の碑文が残されている。²⁾

そのうち最古かつもっとも有名な「浴翠山靈濟塔記」(表 1 の II。1343 年建立) によれば、浴翠山 (Non Nước 山) には李朝の広祐 7 (1091) 年に靈濟塔が建設され、その後荒廃していたのを、僧智柔が開祐 9 (1337) 年から 6 年がかりで再建事業を行った。³⁾ 黎朝期以降も浴翠山は名所かつ戦略拠点で、阮朝の『大南一統志』寧平省・山川・護城山条には、張漢超の故事の

表 1

番号	題名	高さ×幅 (cm)	年代	備考
I	太上皇帝聖旨	220×60	紹豊己丑 (1349)	後 2 行は黎朝の追刻
II	浴翠山靈濟塔記	138×191	紹豊 3 (1343)	
III	なし	70×30	なし	欠落多し
IV	なし	65×45	癸亥年 (1383?)	乙丑 (1385) に 2 行追刻
V	施濟病田碑	88×100	なし (IV と同年?)	
VI	なし	102×88	なし	大治 9 (1365) 以後
VII	なし	55×52	なし	冒頭が欠落。後半 3 行は昌符 9 年乙丑 (1385) ?
VIII	なし	165×135	なし	紹豊 3 (1342) ?

注：番号は Liền 卒業論文中のもの

2) Liền が卒業論文を執筆した際に、ニンビン市文化局 Nhà Văn hoá Ninh Bình で、1904 年に Đoàn Triến が山内の碑文の大半を収録した『浴翠山詩録』を編み、1985 年には市文化局がその現代ベトナム語訳 (追加収録あり) を作成していると聞いたが、現物はどちらも見る事ができなかった。

3) 『皇越文選』巻 2 の録文は「山在安康社大登社、原名氷山、張漢超始改称浴翠」との注釈を付す。

ほか、黎朝の行宮がここにあり聖宗（在位1460-97）もここに遊んで詩を残したこと、阮朝明命2（1822）年、紹治2（1842）年にも皇帝の行幸があり、紹治帝はここに砲台を築かせ山を護城山と命名したことなどが見える。また同書・古蹟・浴翠山故倉条には、景興34（1779）年に喬岳侯阮儼が、長安屯田使としてこの地域で民を募って屯田させ、浴翠山に倉を建てて収穫を納めさせたとある。

山の南側に山頂に上る92段の石段があり、表1のうち、碑文Ⅰ～Ⅵはその右側に立ち上がった西ないし西南に面した岸壁に刻まれた磨崖碑である。Ⅶ、Ⅷはそこから砲撃かなにかにより転げ落ちたらしい、石段登り口のすぐ右側に位置する二つの岩塊にそれぞれ刻まれている。このうち、阮朝（1802-1945）初期の『皇越文選』『皇越詩選』など詩文集の録文で以前から知られていたのが、陳朝後期の文人官僚として知られる張漢超が残した「浴翠山靈濟塔記」（碑文Ⅱ＝文選巻2）と、同じく碑文Ⅵの一部に含まれる范師孟の「登浴翠山留題」（詩選巻2）で、この2つと、同山の田地への侵犯を禁じた碑文Ⅰ（明宗上皇による）は最近、漢喃研究院も拓本を取っている（拓本番号 30256～8）。^{補注}

Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵの本文、Ⅶ、Ⅷはいずれも土地などの寄進の記録である。Ⅲはまったく年代を欠くが、南を丙と書く避諱（161ページ注8参照）などから陳朝後期の碑文と見られる。その他の碑文もすべて、1343年に靈濟塔の重修が完成したのち陳朝末までの寄進碑文と考えてほぼ間違いはない（細かい年代考証は Lê Thị Liên [1989: 54-59]）。このうちのⅧこそが、Maspéro の紹介した護城山碑である。

護城山碑文は、表1のように碑刻面の幅が135cm、高さは中央部で165cmほどで、上端は11行目までが岩が割れて右へ行くほど大きく欠けている。21行目以降でも左へ行くほど下がっているが、こちらは岸壁の形状に合わせたもので、前行の最下段と文章がつながっている。全体で33行、うち9行目には割注があり、最終行は32字目以降が2行に分かれている。字の大きさ、1行あたりの字数はまちまちだが、欠落のない中央部では、記事の境目に挟まれた1字分の空白を含めて59～65字、32行目では50字である。右上の欠落のほか、8、9行目、11～15行目と22～29行目の中央、26、27行目の下方、6行目までと20～23行目の下端などにもそれぞれ欠落がある（砲弾の痕かと思われる）。大半は数文字分だが、24、27、28行目あたりは10文字あまりが欠けている。それ以外の文字は、おおむね鮮明である。

[補注] 清水・Liên・桃木は、98年7月21～23日に Non Nước 山の現場に赴いたが、碑文Ⅶはどこかに運び去られたのか、見る事ができなかった。また桃木は8月に漢喃研究院を訪れ、目録で「年代不明」とされているものの中にⅢ～Ⅷの拓本がすべて含まれていることを発見した。いずれも92～93年ごろ収集されたらしい（拓本番号：Ⅲ＝29110、Ⅳ＝29113、Ⅴ＝29097、Ⅵの全文＝29109、Ⅶ＝29120、Ⅷ＝29122）。それらの比較により本稿の考察はさらに充実しうるのだが、時間の都合により公表は別の機会に譲りたい。

II 本文と訳注

以下、護城山碑文の本文、訳注、ならびに注釈を示す。

【本文】

【1】：原文の行数

⊔：欠落箇所にあてはまると推定される字

…：欠落箇所（字数不明）

□：欠落箇所（1字分）

×：字が判読できない箇所

○：建立以降に削り取られた箇所（1字分）

(?)：直前の字が不鮮明

< >：割註

—：固有名詞

護城山碑

a. 【1】…紹豊二年壬午^{注1}畢工。越明年春大會慶讃。一時聞者咸來瞻禮。迺三月望封…【2】
…刻于石永貽厥後。

b. 【3】…所，^{補注1}

b-1. 内壹所近本寺。除舊常住^{注2}地自涇^{注3}口至寺園門路，新施拾伍面^{注4}。東界…【4】…園，
東闊^{注5}波^{注6}拾陸篙^{注7}，界松路，西闊波拾篙，界小路，丙^{注8}長^{注9}漆拾篙，界小路，北長漆拾
篙，界大路。

b-2. 壹…【5】…界杜用田，丙闊肆篙伍尺^{注10}，界杜鬼戰田，北闊肆篙五尺，界多馬^{注11}。

c. 其時，在安登^{注12}奴管社^{注13}陶鈍，知社^{注14}范鯨等…【6】…高，有上下層。

東長二十二高^{注15}十尺，界范恭，西長二十高五尺，界劉同，丙活^{注16}二高十三尺，界大路，北
活二高一尺，界陶…

d. 【7】…泊^{注17}姉都^{注18}陳大，字真修婆^{注19}，施在寨雷洞田一所。

東長一面^{注20}九高，近小路，長一面九高，近寧个染，丙活一面四高，近小路，北活八高，近主

- e. 【8】…男勇首^{注21}阮波来，妻鄭氏…田在拋洞没^{注22}面，
東近界，西近施主，丙近阮氏挑，北近阮分，
- f. 在黎舍社^{注23}養姆阮念，施田【9】…隊，
東西近賣主，丙近黃勤路，北近三寶。〈□其田黎舍洞，今賣換施於此。〉
- g. 在攏鄉^{注24}蔡氏，字崇德居士，泊莊氏，字慈忍比丘尼，施錢二百貫，買田二面在種岡【10】…
- h. 又論冊内戸^{注25}張玉凜，施田在種岡盜檜洞^{注26}間居人民，拾面，以回向故偶昭勲王^{注27}子陳翁猛。
- i. 僧德增，施沒伯^{注28}貫。在黃江口市^{注29}〈字保×婆〉施波拾貫，買沒面波高^{注30}【11】…隊，東近三寶。
- j. 僧德雲，一伯貫。在阿砧市…張氏謙，一伯貫。蒙冊^{注31}慈圓婆，一伯貫。埋橋社^{注32}德圓翁^{注33}・妙善婆，伍什貫。勝福翁，什貫。【12】□當社○○婆，五十貫。黎舍社○○婆，四十貫。共計…面在衆岡洞，近三寶田。
- k. 棹社^{注34}内侍令史大文公^{注35}丁了，泊養婆陳巴，施田在婆俱^{注36}冷更洞大【13】神隊沒面令^{注37}沒高拾尺。
東拾伍高拾哈^{注38}尺，近陶質・武爛，西拾…密・費安，丙漆高波尺半，近武収，北漆高，近謝黨。
- l. 婆俱社舍人^{注39}武湯，泊室武爛，施田伍面【14】在冷更洞。
東西各長哈面^{注40}高令伍尺，東近武湯，西近丁了，丙…尺，丙近許論，北近范婆礼。
- m. 阿空社，虎翊都^{注41}火頭^{注42}子朝班都^{注43}舌（？）^{注44}破鄰，泊室陶氏特，施田【15】阿空洞伍高。
東西各活四高，東令拾哈尺半，近阮麻礼，西令拾波…，丙北各長久高，丙令拾波尺半，近阮利，北令拾貳尺，近丁塢。□

n. 在茄鄉^{注45}銀青光祿大夫【16】上將軍^{注46}上品明字^{注47}范，字曰覺照真士，洎族姬^{注48}陳，字曰勝信婆，施田婆俱浪了洞伍面，涇口隊。

東西各長沒伯肆拾高有餘，東近民，西近司布隊，丙肆高陸尺，近【17】大江，北哈高拾尺，近小涇。□

o. 福城社^{注49}慈福婆，施田婆勾洞哈面，近施主。□

p. 在福城社長堂侍衛人火頭須^{注50}阮卯，字覺心，洎室姊都林末，施波伯伍拾六貫，買【18】田在種岡洞陸面，近三寶。

q. 在武林溪个耽社^{注51}黎氏柴，三高什一尺在潮洞紹田。

東長九高六尺半，近女（？）^{注52}田，西長陸高拾哈尺半，近檜田，丙活四高拾波尺半，近大路，北活【19】四高五尺，近戶舍^{注53}阮輕田。

r. 在阿空社抄社劉容，并室黃氏侶，施地二所。

r-1. 内一所墪^{注54}二面二高。

東長二十二高，近當戶界。西長二十二高，近黎聊，丙活十高，近陶也，北活十□，【20】近大路。

r-2. 一所弄洞田五高。

東活三高二尺，近主^{補注2}施，西活三高二尺，近范越，丙長十六高二尺，近范可羅，北長十六高二尺，近小路。

共計二面七高。○○…

s. 【21】在安登社劉舍廊^{注55}比丘守愚一人，施田地^{注56}在佉尾社黃山洞元（？）安賴隊哈所。内壹所肆面，

s-1. 東伴^{注56}闊漆篙，界當衙田，西伴闊漆篙，界范休田…【22】拾捌篙哈尺，界阮赤等田，北伴長伍拾捌篙哈…

s-2. 東伴闊漆高漆尺，界小路，西伴闊漆高漆尺，界宋抄田，丙伴長拾哈篙…【23】阮氏蠡田，北伴長拾哈篙拾壹尺，界宋…考劉大郎，四月初九，慈妣劉大娘，七月十七。□

t. 在安杲社^{注57}内戶陳炯旱，施…【24】安杲・瀾洞用哈面。

東伴闊拾肆篙，…施主田，丙伴長拾陸篙，界守墓田，北伴長拾陸篙，界施主田。□

u. 【25】在安登社，傑（？）特^{注58}令堂書兒火頭^{注59}...

…伴長拾篙漆尺，界當第田，西伴長拾壹篙壹尺，界黃挺田，丙伴【26】闊玖篙拾^{注60}尺半，界阮孝田，北伴闊…回向善修居士・慈順婆。□

v. 在安登社□□令堂守墓書兒火頭^{注60}陶箇【27】株，并妻呂氏依，施田地在僊洞哈所，…

v-1. …尺，界費氏淺田，西長拾漆篙捌…嚴田，丙闊肆篙伍尺伍【28】寸^{注61}，界杜箇尼田，北闊肆篙伍尺半，界…

v-2. …陶箇支田，西界杜氏呂等，丙界當第田，北界大路。

v-3. 共計用壹面。□

w. 【29】在安登社虎翊火頭^{注62}陶洪，妻杜氏…氏禮哈人，施地宅在仙洞用肆篙。

東西丙並界三寶地，北界大路。□

x. 在安【30】登社陶氏嚴，并孫陶幽哈人，施地宅□□□用肆篙，

東界三寶地，西界杜（？）个尼田，丙界多馬，北界大路。□□

y. 在安登社上班^{注63}劉隴，【31】釋字悟惠，施哈伯貫。養姆鄧氏阿朗，施壹伯貫。在多稼社^{注64}書都火^{注65}楊葵（？），并室范氏可磊，施壹伯貫。比丘潛聞，施哈伯貫。

【32】共計陸伯貫，買□中品^{注66}台（？）厨田五面，在偈洞。

y-1. 内二隊一所没面。

東長拾篙，近親王班任鋒^{注67}，西長拾篙，近親王班任社，丙活拾篙，近賣【33】主，北活拾篙，近小路。

y-2. 又二隊一所波面有餘。東近親王班任社，西近親王班任戶。（以下2行に分れる）丙活拾篙，近潭，北活拾篙，近小路。

y-3. 又三隊一所没面。

東長拾篙，近親王班（改行）任戶，西長拾高，近賣主，丙活拾高，近立都^{注68}阮働，北活拾高，近小路。

【試訳】

護城山碑

a. …紹豊2年壬午の年（1342年）に工事を終え，次年の春になって，完成祝いの会を催し

た。その時、知らせを聞いた者がこぞって訪れ会を賑わした。3月になって、望祭が行われた(?)。

…石に刻んで、後の代まで残していくことにする。

b. …

b-1. その内の一所はこの寺に近い。水路の口から寺の庭の門に面する道までのもともと寺院の「常住」としていた土地以外に、新たに15面を寄進した。東は…と境界を接し、…

東は幅36高で、松の並木道を境にしている。西は幅30高で、小路を境にしている。南は長さ70高で、小路を境にしている。北は長さ70高で、大路を境にしている。

b-2. …, 杜用の田と境を接している。南は幅4高5尺で、杜鬼戦の田と境を接している。北は幅4高5尺で、墓地と境を接している。

c. その時、安登社の奴管社陶鈍と知社范鯨が…、上下の層があった。

東は長さ22高10尺で、范恭の土地と境を接している。西は長さ20高5尺で、劉同の土地と境を接している。南は幅2高13尺で、大路と接している。北は幅2高1尺で、陶…の土地と境を接している。

d. …並びに姉都陳大、字真修婆が、寨雷洞の田を1所寄進した。

東は長さ1面9高、小路に近い。西は長さ1面9高、寧个染の土地に近い。南は幅1面4高、小路に近い。北は幅8高、…に近い。

e. …男勇首阮波来、その妻鄭氏…は、拋洞の田を1面寄進した。

東は洞の境に近い。西は施主の土地に近い。南は阮氏挑の土地に近い。北は阮分の土地に近い。

f. 黎舍社の養母阮念は、…隊の田を寄進した。

東西はそれぞれ売り主の土地に近い。南は黄勤路の土地に近い。北は三宝に近い。〈その田を黎舍洞に…が、今は売り換えてここに寄進することになった。〉

g. 獵郷の蔡氏、字は崇徳居士、並びに莊氏、字は慈忍比丘尼は、錢200貫を寄進し、田を2面種岡洞に買った。…

h. また、論冊の内戸張玉凜は、種岡社盍檜洞の人民が点在する田を10面寄進して、昭勲王の子陳翁猛を回向した。

- i. 僧徳増は、100貫を寄進した。黄江口市の字保？婆は、30貫を寄進し、1面3高…の田を…隊に買った。東は三宝に近い。
- j. 僧徳雲は、100貫を寄進した。阿砧市の…張氏謙は、100貫を寄進した。蒙冊の慈円婆は、100貫を寄進した。埋橋社の徳円翁・妙善婆は、50貫を寄進した。勝福翁は、10貫を寄進した。？當社の？？婆は、50貫を寄進した。黎舎社の？？婆は、40貫を寄進した。合計…面を衆岡洞に…、三宝田に近い。
- k. 棹社の内侍令史・大文公丁了、並びに養婆の陳巴は、婆俱社冷更洞の大神隊の田を1面1高10尺寄進した。
東は15高12尺、陶質・武爛の土地に近い。西は10…、？密・費安の土地に…。南は7高3尺半、武収の土地に近い。北は7高、謝黨の土地に近い。
- l. 婆俱社の舎人武湯、並びに妻の武爛は、冷更洞の田を5面寄進した。
東西各々長さ2面8高5尺、東は武湯の土地に近く、西は丁了の土地に近い。南…尺、南は許論の土地に近く、北は范婆礼の土地に近い。
- m. 阿空社の虎翊都火頭子朝班都舌（？）破鄰、並びに妻の陶氏特は、阿空洞の田を5高寄進した。
東西は各々幅4高。東は12尺半、阮麻礼の土地に近い。西は13…。南北は各々長さ9高。南は13尺半、阮利の土地に近い。北は12尺、丁塢の土地に近い。
- n. 茄郷の銀青光禄大夫・上將軍・上品明字范、字は覚照真士、並びに族姫陳、字は勝信は、婆俱社浪了洞の涇口田を5面寄進した。
東西各々長さ140高余り、東は民家に近く、西は司布隊に近い。南は4高6尺、大江に近い。北は2高10尺、小水路に近い。
- o. 福城社の慈福婆は、婆勾洞の田2面を寄進した。施主の土地に近い。
- p. 福城社の長堂侍衛人火頭須阮卯、字は覺心、並びに妻姉都林未は、356貫を寄進し、田を種岡洞に6面買った。三宝に近い。

q. 武林溪个耽社の黎氏柴は、潮洞の紹田（？）を 3 高11尺寄進した。

東は長さ 9 高 6 尺半、女の田（？）に近い。西は長さ 6 高12尺半、檜の田（？）に近い。南は幅 4 高13尺半、大路に近い。北は幅 4 高 5 尺、戸舎阮輕の田に近い。

r. 阿空社の抄社劉容、並びに妻黃氏侶は、土地 2 所を寄進した。

r-1. 内 1 所は燈、広さ 2 面 2 高。

東は長さ22高、當戸の境に近い。西は長さ22高、黎聊の土地に近い。南は幅10高、陶也の土地に近い。北は幅…、大路に近い。

r-2. もう 1 所は、弄洞の田 5 高。

東は幅 3 高 2 尺、施主の土地に近い。西は幅 3 高 2 尺、范越の土地に近い。南は長さ16高 2 尺、范可羅の土地に近い。北は長さ16高 2 尺、小路に近い。

r-3. 合計、2 面 7 高。

s. 安登社劉舎廊の比丘守愚は、一人で、包尾社黃山洞の？安頼隊の田を 2 所寄進した。

内 1 所は 4 面。

s-1. 東の境は幅 7 高、當衙の田と境を接している。西の境は幅 7 高、范休の田と境を接している。…18高 2 尺、阮赤等の田と境を接している。北の境は長さ58高 2 …

s-2. 東の境は幅 7 高 7 尺、小路と境を接している。西の境は幅 7 高 7 尺、宋抄の田と境を接している。南の境は長さ12高…阮氏蠡の田…北の境は長さ12高11尺、宋…と境を接している。

…亡き父劉大郎は、4 月 9 日、亡き母劉大娘は、7 月17日。

t. 安果社の内戸陳炯早は、安果社瀾洞…を 2 面寄進した。

東の境は幅14高、…施主の田…南の境は長さ16高、守墓の田と境を接している。北の境は長さ16高、施主の田と境を接している。

u. 安登社の傑（？）特令堂書兒火頭…

…の境は長さ10高 7 尺、當第の田と境を接している。西の境は長さ11高 1 尺、黃挺の田と境を接している。南の境は幅 9 高 1（？）尺半、阮孝の田と境を接している。北の境は幅…善修居士・慈順婆を回向した。

v. 安登社の？？令堂守墓書兒火頭陶箇株、並びに妻の呂氏依は、僊洞の田を 2 所寄進した。

v-1. …

…尺、費氏浅の田と境を接している。西は長さ17高 8 …嚴の田…。南は幅 4 高 5 尺 5 寸、杜

箇尼の田と境を接している。北は幅4高5尺半、…と境を接している。

v-2. …

…陶箇支の田…、西は杜氏呂等の土地と境を接している。南は當第の田と境を接している。北は大路と境を接している。

v-3. 合計2面である。

w. 安登社の虎翽火頭陶洪、並びに妻杜氏…氏礼の二人は、仙洞の宅地を4高寄進した。

東西南いずれも三宝地と境を接している。北は大路と境を接している。

x. 安登社の陶氏巖、並びに孫の陶幽の二人は、…宅地4高を寄進した。

東は三宝の地と境を接している。西は杜(?)个尼の田と境を接している。南は墓地と境を接している。北は大路と境を接している。

y. 安登社の上班劉隴、釈字悟恵は、200貫を寄進した。養母鄧氏阿朗は、100貫を寄進した。多稼社の書都火楊葵(?), 並びに妻范氏可磊は、100貫を寄進した。比丘潜聞は、200貫を寄進した。合計600貫。?中品台(?)厨の偈洞の田を5面買った。

y-1. その内二隊の1所は、1面。

東は長さ10高、親王班の任鋒に近い。西は長さ10高、親王班の任社に近い。南は幅10高、売主の土地に近い。北は幅10高、小路に近い。

y-2. また、二隊の1所は3面余り。

東は親王班の任社に近い。西は親王班の任戸に近い。南は幅10高、淵に近い。北は幅10高、小路に近い。

y-3. また、三隊の1所は1面。

東は長さ10高、親王班の任戸に近い。西は長さ10高、売主の土地に近い。南は幅10高、立都阮働の土地に近い。北は幅10高、小路に近い。

【注釈】

注1 紹豊二年壬午：西暦1342年。

注2 常住：原作が大治壬寅(1362)年に成立したとされる竹林派第2世法螺禅師の「第二祖年譜実録」(景興26<1765>年刊の『三祖実録』、嗣徳9<1856>年再刻の「第二代祖碑」などのテキストが有名)に、土地を寄進して「三宝常住産」としたという記事が頻出する。同じ陳朝期の「大悲延明寺碑」(所在地は現 Hưng Yên 省北端の Mỹ Văn 県。開泰4<1327>年造。漢喃研究院拓本5309-12)にも「常住三宝物」(右面2, 4行目)、「示徳社寺碑」(所在地は現 Hải Dương 省 Gia Lộc 県。開祐3<1331>年造。漢喃研究院

拓本5114-5)には「毎物為常住」(表6行目)、「侵常住物」(同10行目)などの表現が見える。護城山碑に見えるように、寺院が寄進を受けた財産には単なる三宝田、三宝土などの呼称も記録に頻出するのだが、「第二祖年譜実録」興隆18(1310)年3月条に「賜安丁郷上田八十畝及耕夫，以給衆食，四五年後返之」とあるところを見ると、財産寄進にも一時的な用益権の譲渡ないしは取り戻し権付き所有権譲渡(僧侶個人への?)と永久的で取り戻し権のない所有権の譲渡(寺院への?)があり、常住は後者を指したものかと思われる。

注³ 涇 kênh : 字喃。「運河，用水路」の意味。

注⁴ 面 diện : 面積の単位。

本碑文で使用される長さ・面積を示す単位は、それぞれ「面 diện → 篙(高) sào → 尺 thước → 寸 thôn」(長さ)、「面 → 篙(高) → 尺」(面積)である。それらの相関関係は以下のように推定される。

まず、「…内二隊一所没面。東長拾篙，近親王班任鋒，西長拾篙，近親王班任社，丙活拾篙，近賣主，北活拾篙，近小路。」(y-1.)の記述から，[10高(長さ)×10高(長さ)=1面(面積)]という関係が成り立つ。次いで，「…一所弄洞田五高。東活三高二尺，近主施，西活三高二尺，近范越，丙長十六高二尺，近范可羅，北長十六高二尺，近小路。」(r-2.)の記述から，[3高2尺(長さ)×16高2尺(長さ)=5高(面積)]という関係が成り立つ。

ここで，仮に「15尺=1高」という従来面積に関して成立したことが知られている等式を長さの関係に置き換えて上の式の左辺を計算すると，[(3+2/15)高(長さ)×(16+2/15)高(長さ)=50.551…高(長さの2乗)]となり，したがって，上の等式が当時長さに関して成り立ったと仮定すると，より単純化した[1高(長さ)×10高(長さ)=1高(面積)]という関係が成り立つことになる。その他本碑文中には，長さの単位「面，寸」，面積の単位「尺」が使用されているが，ここではそれらに関して積極的な提案をすることはできない。

ちなみに，一般に面積を表わす単位として用いられてきた「篙(高)」sàoがかつて長さを示すために用いられていた可能性を示す記述として，Alexandre de Rhodes [1651: 678]の以下の項目が挙げられる。

“sào : vara : pertica, ae, (竿) sào đo ruộng, vara de medir as varzeas : pertica qua Annamitae sosuos dimetiuntur agros. (安南人が農地を測量するために用いる竿)”

これより，「篙」は元来長さを測量する竿を指したものと思われる。

また，「面」が後世の「畝」に相当するという事実は，『大越史記全書』本紀5，陳太宗元豊4(1254)年6月条「鬻官田，每一面錢五鎰(時謂畝爲面)許人民賣爲私」に見ることができる。

注⁵ 闊：「幅」つまり，長方形(もしくはそれに近い形)の短い方の一辺の長さを示す。

注⁶ 波 ba : 字喃。「三」の意味。

注⁷ 篙 sào : 字喃。長さの単位。注4参照。

注⁸ 丙：「南」の避諱字体。『大越史記全書』本紀6，陳英宗興隆7(1299)年夏4月12日条に「詔禁欽明大王，善道國母諱(欽明諱柳，善道諱月，善道柳夫人)臨文不得用。若魏，濕，南，乾，蘇，峻，英，頼等字，臨文減畫。陳諱外親，自此始。」と，「南」の字が避諱文字として挙げられているが，誰の諱かは不明[Ngô Đức Thọ 1997a: 32; 1997b: 18-23]。ちなみに，同書本紀8，陳廢帝光泰8(1395)年春2月20日条に「却月字南字諱，許用依舊。」とあることから，当該文字の避諱が1395年に停止された事実が窺える。

注⁹ 長：「長さ」つまり，長方形(もしくはそれに近い形)の長い方の一辺の長さを示す。

注¹⁰ 尺 thước : 長さの単位。注4参照。

注¹¹ 多馬 tha ma : 字喃。「墓地」の意味。漢字音 đa mã との対応が不規則だが，暫時的にこう解釈する。

注¹² 安登：s, u, w, xにも見える社名。19世紀の『各鎮総社名備覧』(清平道)，『同慶御覧地輿志』(寧平省)に，安慶県安登総の名がのる。現Ninh Bình市中心部から西南部にかけての地域である。なお以下では，寄進主体の人間が所属する社・郷・市・冊(=柵)・廊などの名前と，土地が所属する洞・隊の名前

が記されている。まず郷や冊は李朝期には、近世の県に当たるような大きな単位だったと思われるが〔桃木 1988: 255-256〕, ここでは近世と同じく、社と同格の単位になっていたのかもしれない。また, s. に「安登社劉舎廊」があるから廊 (làng) は行政村である社の下位の自然村と考えられる。k. (12行目末尾) に「婆俱冷更洞」の土地寄進, l. に婆俱社人による冷更洞の土地の寄進が見え, s. には「鉅尾社黄山洞」も見えるから、洞も社の下位区分であろう。とすると g. 末尾の種岡は洞名だが h. 「種岡崙檜洞」の種岡は社名ということになる。f. には黎舎社と黎舎洞が見えるから、近世の総名が中心的な社名と同じであることが多かったように、陳朝の社名は中心的な洞名に従って名付けられることが普通だったのだろう。最後に, n. の婆俱 (社) 浪了洞の涇口隊, 司布隊, s. の鉅尾社黄山洞では安頼隊, y ~ y-3. では (多稼社) 偈洞の二隊・三隊など隊名が土地表示に使われている。隊は軍事組織でなければ司布隊のような職能による編成の単位と思われるが、それらも (洞より小規模な) 土地の用益権ないし所有権をもっていたのであろう。

注¹³ 奴管社：社の奴婢を管理する村役人か。

注¹⁴ 知社：陳朝の社官としては、天応政平11(1242)年に設けられた大小司社、社正、史監などが有名だが〔『大越史記全書』本紀5〕, 知社は初見で、いかなる職掌を有したかわからない。

注¹⁵ 高 sào : 字喃。注7「篙」の略字体。

注¹⁶ 活：注5「闊」の略字体。

注¹⁷ 泊 ky : 漢字「泊」(およぶ, いたる)を「~および…」の意に転用したものであろう。

注¹⁸ 姉都：現代ベトナム語の chị cá 「長姉」の意味か？

注¹⁹ 婆 bà : 現代ベトナム語で女性の名前に冠する敬称。

注²⁰ 面 diện : 長さの単位。注4参照。

注²¹ 男勇首：『安南志略』14：官制・近侍官条の「侍衛人勇者」は「勇首」の誤りと思われる。ほかに『大越史記全書』本紀6：興隆12(1304)年3月条に「試天下士人、賜狀元莫挺之太学生勇首、充内書家」、上記「大悲延明寺碑」に「内火書火勇首」(表11行目)、「示徳社寺碑」に「在烘路不関社祇候勇首須阮保妻陶氏 施橙在巨陀上下」(14行目下段)、「在曳社書火勇首阮鴉」(20行目下段)などの記事があり、書家、祇候など宮中の近侍や書記に与えられた爵位ないし官階を示す呼称と思われる。その前の「男」は勇首にかかるかどうかを含めて意味不明。

注²² 没 một : 字喃。「一」の意味。

注²³ 黎舎社：『各鎮総社名備覧』『同慶御覧地輿志』に長安府嘉遠県黎舎総の名が見える。古都 Hoa Lư の西隣の地域である。

注²⁴ 獲郷：『大越史記全書』本紀5：紹隆4(1261)年条の「史臣呉士連曰」に陳守度の「采邑」としてあげられているのが有名で、『欽定越史通鑑綱目』10：陳廢帝昌符5(1382)年条註によれば「属南定省美祿県」。Nam Định 省立博物館には、20年ほど前に Bình Lục 県 Vũ Bản 社 (現在は Hà Nam 省に属す)で陳守度の屋敷跡とされる遺跡を発掘した際の記録書類が残されている。

注²⁵ 内戸：李朝では功臣に一定戸数の食邑・実封を与えたこと、黎朝でも食戸・鹹塩戸などを給したことがよく知られているが、陳朝で「戸」の区分、そこからの収取がどのように行われたかはまったく不明である。

注²⁶ 崙檜洞：『各鎮総社名備覧』『同慶御覧地輿志』にはいずれも、現 Ninh Bình 省の長安府安慶県観榮總に崙伍社、崙山社、大崙社の名が見えるので、崙檜洞もこのあたりかと思われる。現在の Hoa Lư 県 Ninh Hoà 社 (古都 Hoa Lư 〈阮朝の長安總〉の東隣)の地である。

注²⁷ 昭勲王：他の史料には見いだされないが、陳太宗(1218-77)の子には昭明王光啓、昭国王益稷、昭文王日燭などがあり、昭勲王も太宗の子またはオイだったかもしれない。

注²⁸ 伯 bách : 「百」bách の意味。

注²⁹ 黄江口市：古都 Hoa Lư 方面から流れ出る Hoàng Long 川 (李朝後期に長安府一帯を大黃江と呼んだの

はこの川の川筋の意味であろう)の出口、つまり Đáy 川に注ぐ現在の Gián Khẩu の地であろう。

注³⁰ 高 sào : 面積の単位。注4参照。

注³¹ 蒙冊: 『大越史略』3: 建嘉13(1223)年孟冬条に「太尉伐蒙柵山獠」とある。同書貞符9(1184)年冬条「司蒙柵・鄭柵・烏米柵叛」の司蒙柵も関係があるかもしれない。李朝後期に頻出する「山獠」は、現 Ninh Bình の「大黃州」を含む紅河デルタ西方山間部に住み、Muròg 族の祖先(Kinh 族との境界はきわめて可变的)に当たるような人々と考えられるので[桃木 1992: 190, 注65], 蒙柵(冊)を Non Nước 山の近くに求めることに問題はない。

注³² 埋橋社: 同音の枚棣 Mai Cầu 社は『各鎮総社名備覧』山南上鎮里仁府清廉県枚棣總(『同慶御覧地輿志』では河内省。現 Hà Nam 省西南端の Thanh Liêm 県), 山南下鎮義興府懿安県布政總(現 Nam Định 省西北端の Ý Yên 県)などに見いだされる。後者なら Non Nước 山のすぐ北側である。

注³³ 翁 ông : 現代ベトナム語で、男性の名前に冠する敬称。

注³⁴ 棹社: 碑文 V 26行目には棹郷が見える。『各鎮総社名備覧』『同慶御覧地輿志』の安慶県善棹總に当たるとすれば、現在の Ninh Bình 市東南部一帯と考えられ、現在も市の東南約 1 km の地点に thôn Hạ Trạo がある。

注³⁵ 内侍令史・大文公: 李朝期には内人、内侍、内常侍などの肩書きが史料に頻出するが、陳朝では『大越史記全書』5: 宝符2(1274)年条に「内侍学士」が見える程度で、近侍官の肩書きは有名な「行遣」に収斂していったように見える。令史は中国では文書事務官だが、隋唐以降は地位が低かった(『通典』22: 職官4・尚書上・歴代都事主事令史条など)。なお陳朝の公・侯など五等爵についてはまったく研究がない。

注³⁶ 婆俱社: 碑文 VII 19行目に「建康府路婆俱洞」の名が見える。陳朝末期の建康府路は現 Nam Định 省西部・Ninh Bình 省東部に当たる[桃木 1983: 73, 注17]。

注³⁷ 令 linh : 「零」linh の意味。

注³⁸ 哈 hai : 字喃。「二」の意味。

注³⁹ 舍人: 『大越史記全書』本紀5: 建中2(1226)年条に「命輔國太傅馮佐周權知父安府, 許与人爵, 自佐職舍人以下, 詣闕奏聞」とあり, 「中書舍人」のような官名というよりは爵位の一つと見られる。

注⁴⁰ 糝 tám : 字喃。「八」の意味。

注⁴¹ 虎翊都: 『安南志略』14: 兵制条に「親軍, 聖翊都・神翊都・龍翊都・虎翊都」と見え, 近衛軍の部隊名である。

注⁴² 火頭: (注65の「書都火」にも関連)『大越史記全書』本紀3: 広祐4(1088)条「置十火書家」のほか, 同書や『大越史略』の李紀には「内人火頭」「○○都火頭」などの肩書きが散見し, 「火」は宮内官や近衛軍の組織単位(『大越史記全書』陳紀には「内書火(局)」が散見する), 火頭はその長を指すように見える。『安南志略』14: 官制・近侍官条, 「示徳社寺碑」(表17行目下段)にも「侍衛人火頭」が見える。ただし, 「○○都の火頭」は見えても「○○火のかしら」は見えないので, 火頭は組織の長の実職よりは, そのクラスに当たる官階ないし爵位(勇首の上か)を指したもののように思われる。

注⁴³ 朝班都: 「都」は注41のような近衛軍の部隊名として李陳朝期の記録に頻出するほか, 李朝期の記録には『大越史略』3: 大定18(1157)年条に「諸殿前使及官職都火頭, 不得服私家役」など「官職都」(および「主都」の肩書き)も散見する。宮内官の(火より大きい?)組織名かと思われるが詳細は不明である。朝班都もそうした宮内官ないし宮中雑役の組織名かと思われる。また『安南志略』14: 官制条には世襲郷邑官として主都の名が見える。

注⁴⁴ 舌: Ngô Đức Thọ [1986: 21-23; 1997a: 45] が陳朝期の避諱字としての紹介する「乗→乘」の例から類推すると, これも避諱字の一種かもしれない。

注⁴⁵ 茄郷: 碑文 III 1行目に「天長路茄郷」とある。天長は現 Nam Định 市一帯。

注⁴⁶ 銀青光祿大夫・上將軍: 光祿大夫は唐代以降の文散官で(散官は実務がなく官僚組織内での位置だけ

を示すような官名), 開元25年制では従二品, 金紫光祿大夫が正三品, 銀青光祿大夫は従三品だった(『通典』40: 職官22・秩品5・大唐条)が宋制では金紫光祿大夫は正二品, 銀青光祿大夫は従二品に上昇している(『文献通考』66: 職官20・官品条)。また上將軍は唐制では従二品で(『通典』29: 職官11・武官下・大將軍), 宋では定員のない名誉職とされた(『宋史』166: 職官9・環衛官)。1343年段階の陳朝の二, 三品の高官で范姓をもち Ninh Bình に本拠を有したという条件に当てはまる適当な人物はまだ見いだされていない。

注47 上品明字: 『安南志略』14: 官制・近侍官条に見える。いっぽう『大越史記全書』には, 卷5: 紹隆10(1267)年3月条に王族について「四世孫賜爵明字, 五世孫上品」とあるほか, 上品や明字の肩書きを帯びた人名も散見する。これらと上品明字との関係はわからない。

注48 族姫: 陳姓であるから, 王族女性の意味であろう。

注49 福城社: Non Nước 山から Vân Sàng 川をはさんだすぐ対岸の Phúc Am (『各鎮総社名備覧』『同慶御覽地輿志』の安登總福庵村)には張漢超祠があるが, 地元ではそこが陳朝期の福城社であると言われる。

注50 長堂侍衛人火頭須: 長堂は不明。侍衛人火頭は注42参照。「須」も注21に引く「示徳社寺碑」に「祇候勇首須」の句があり, 火頭や勇首に関連する語であることは間違いないが, 意味はわからない。

注51 武林溪个耽社: 『安南志(原)』2: 岩洞条に「武林洞在安寧県。洞中寛平, 有地数十畝。陳氏居此, 号竹林大士。中有太微觀」とある(『安南志略』1: 山・武林洞条にも陳仁宗が出家してここで修行した話が載る)。太微觀址は現 Hoa Lư 県 Ninh Hải 社にある。

注52 女: 避諱字の一種か? 注44参照。

注53 戸舎: どんな肩書か不明だが, 紹豊17(1357)年の紀年を冒頭にもつ「福興寺山下左辺碑」(Ninh Bình 省の旧嘉遠県黎舍總整頓社。漢喃研究院拓本19162)15行目にも「戸舎丁元并所役人」の句が見える。

注54 燈: 注21に引いた「示徳社寺碑文」に「橙」を寄進した記事があり, この「燈」と同じ概念と見られるが, どんな土地かわからない。

注55 廊 làng: 字喃。「ムラ」(自然村)の意味。現在でも社(行政村)の下位単位(もっとも基礎的な集落 xóm より上位)の呼称としてしばしば用いられる。注12参照。

注56 伴 bạn: 字喃。「畦道」の意味。「畔」と同音による仮借。

注57 安果社: 『各鎮総社名備覧』の安慶県廬陽總条に安果 An Cáo 社の名が見えるのが, これに相当するものであろう。

注58 傑特: 傑の字は不鮮明だが, 傑特でよければ『安南志略』卷1: 山, 『安南志(原)』卷1: 山川などに見える有名な至靈県の傑特山が思い出される。至靈は紅河デルタ東部, 現 Hải Dương 省東北端の Chi Linh 県に当たる。安登社出身で傑特で勤務した人物がいたのだろうか。

注59 令堂書兒火頭: 令堂は不明。『大越史記全書』6: 重興8(1292)年条に「昭道王家書兒」の句が見える。火頭が存在することを考えると, 単なる書生ではなく, 李朝期に頻出する「書家」と同じく, 一定の組織に組み込まれた書記官であろう。

注60 令堂守墓書兒火頭: 注59参照。「守墓」は t. にも「守墓田」が見られるが, 国家の職掌か村落の職掌かなどまったく不明。

注61 寸 thôn: 長さの単位。注4参照。

注62 虎翊火頭: 虎翊都全体の長か, 都の下部に火が複数あったその長か, 実職か爵名かなどすべて不明。

注63 上班: 『安南志略』14: 官制条に「武内上班, 上班, …」と見えるが, 武官の爵位ないし官階の呼称であろう。

注64 多稼社: 『各鎮総社名備覧』『同慶御覽地輿志』に嘉遠県多稼總がある。現在の Ninh Bình 市のすぐ北側に当たる。

注65 書都火: 李朝期に「書家」が頻出するほか, 陳朝では宮中に「内書火局」があり(『大越史記全書』6: 開泰2<1325>年秋8月条), 「内書火正掌奉御」「御書火」などの肩書も散見する。書都火も(地方官衙の?)

書記官組織ないしはそれに対応する官階を示したものではなかろうか。

^{注66} 中品：『安南志略』14：官制・近侍官条には「上品奉御・中品奉御・下品奉御」が列挙されるが、『大越史記全書』6：紹宝5(1283)年秋7月条には「中品黄於令」の名が見え、同重興5(1289)年条には「爵至下品」の句があるから、中品・下品も上品(注47参照)と同じく、単独で爵位として用いられたのであろう。

^{注67} 親王班任録：『安南志略』14：官制条に「親王班、國親爵名」とある。「任録」「任社」は不明。

^{注68} 立都：軍隊ないしは官中・諸官衙の吏役の組織名かもしれないが(注43参照)詳細不明。

[補注1] 所 *thủa*：字喃。村落内小地名を指す。

[補注2] 主 *chủ*：字喃。「ぬし」の意味。直後の「施」がベトナム語の統語法にしたがい、後置修飾要素として使用されているので、「主」は現代ベトナム語 *chủ*(ぬし、あるじ)に相当する語彙と考えられる。

III H. Maspéro [1912] による字喃の利用状況

まず本節で、護城山碑文を紹介した Maspéro 自身がその音韻史研究の中で一般に字喃をどのように利用したかを今一度整理し、従来の音韻史研究における字喃の利用方法を確認しておく。そして次節以降で、最近のベトナム比較音韻論の知見および字喃研究の発展に照らして、本碑文に見る字喃がベトナム語音韻史へどのような貢献をしようのかを検討する。

Maspéro による字喃の利用方法は大きく2つに分かれる。第1の方法は、現代ベトナム語の一音素(主に音節初頭子音)が複数の音素に遡る場合、その痕跡を残す、あるいは残さない字喃を、それら複数の音素の語彙上の分布状況、ならびにそれらが融合する時期を知る手がかりとする方法である。ただし、その背後には字喃が一般に13世紀頃の音韻状況を示唆するという大前提がある。例えば、現代ベトナム語の初頭子音 /t/ (th)⁴⁾ は、ベトナム漢字音の元となる中古漢語の再構音、⁵⁾ ならびに共通するタイ系諸語の語彙の音形との比較から /*s/ および /*t/⁶⁾ に遡る。そこで、現代ベトナム語で /t/ を初頭に持つ音節を表示する字喃の表音要素(声符)の漢字音を見ると、その再構音が一方で /*s/、/*z/ の摩擦音、他方で /*t/、/*ts'/ の有気破裂音あるいは破擦音であり、初頭子音の差異に基づき声符の漢字が選択されていた可能性が窺われる。したがって、それら2系列の音素が現代の /t/ に融合した時期を13世紀から16世紀の間に限定することが可能となる [Maspéro 1912: 45-51]。⁷⁾ 以下、本文にしたがい表2に例示する。⁸⁾

4) 以下、/ / に音素を表示し、現代ベトナム語の場合、それに対応するローマ字正書法を()に示す。現代ベトナム語の音素表記は Hoàng Thị Châu [1989] に基づく清水 [1996: 95] による。

5) 論文中に示された Maspéro 自身による再構音を指す。

6) 以下、再構音 /* / は基本的に Maspéro に従うが、一部一般的な IPA 表記に改めて表示する(特に母音字母)。また、声調番号は繁雑でも元表記のまま示しておく。

7) 下限を16世紀に置く理由は、17世紀のベトナム語(注9参照)が明らかにその変化の完了した状況を示すからである。

8) 紙数の都合上、3例のみ例示する。以下同様。

表2

/*s/ > /t'/				
字喃	字音	声符	漢字音	意味
𠵼	/*s _{it} ¹ / > /t'it ⁶ / (thit)	舌	/*ziēt ₄ / > /t'ist ⁶ / (thiēt)	「肉」
舌	/*s _{iet} ¹ / > /t'ist ⁶ / (thiēt)	舌	/*ziēt ₄ / > /t'ist ⁶ / (thiēt)	「真実の」
𠵼	/*s _{aŋ} ² / > /t'aŋ ⁵ / (tháng)	尚	/*s _{aŋ} ⁴ / > /t'uəŋ ⁶ / (thươŋ)	「月」…
/*t'/ > /t'/				
崔	/t'oj ¹ / (thôi)	摧	/*t'wie ¹ / > /t'oj ¹ / (thôi)	「やめる」
退	/t'oj ³ / (thôi) ^注	退	/*t'wie ³ / > /t'oj ⁵ / (thối)	「吹く」
𠵼	/t'oj ⁵ / (thôi)	退	/*t'wie ³ / > /t'oj ⁵ / (thối)	「習慣」…

注：恐らく /t'oj³/ (thôi) の誤り。

また、現代の鼻音音素 /n/ (n), /m/ (m) はムオン諸語との比較によりそれぞれ /n/, /d/ および /m/, /b/ に遡るが、該当語彙を表示する字喃の表音要素が、それらを弁別することが可能でありながら積極的に区別していないことから、/d/ > /n/ および /b/ > /m/ の変化は13世紀には完了していたと考えられる [ibid.: 58-65]。

表3

/*d/ > /n/				
字喃	字音	声符	漢字音	Murong (Làng Lô) 意味
𠵼	/nă ¹ / (nă)	南	/nam ¹ / (nam)	/đă _m ¹ / 「5」
𠵼	/nuə ⁵ / (nuôc)	若	/nuə ⁶ / (nhươc) ¹⁾	/đă _k ² / 「水」
𠵼	/no ¹ / (no)	奴	/no ¹ / (nô)	/đo ₁ / 「満腹の」…
/*n/ > /n/				
𠵼	/nă ¹ / (nă)	南	/nam ¹ / (nam)	/nă _m ¹ / 「年」
𠵼	/nen ² / (nên)	年	/niên ¹ / (niên)	/nen/ 「土台」
𠵼	/nə ⁶ / (nợ)	女	/nuə ⁴ / (nữ)	/nə ⁵ / 「負債」…
/*b/ > /m/				
𠵼	/muə ⁵ / (muối)	每	/moj ⁴ / (mỗi)	/boj ₂ / 「塩」
𠵼	/maŋ ¹ / (mang)	芒	/maŋ ¹ / (mang)	/baŋ ₁ / 「肩で運ぶ」 ²⁾
𠵼 ³⁾	/măj ¹ / (may)	埋	/maj ¹ / (mai)	/bă _n ¹ / 「縫う」…
/*m/ > /m/				
𠵼	/ma ⁵ / (má)	馬	/ma ⁴ / (mã)	/ma ₂ / 「頬」
𠵼	/măj ¹ / (mây)	迷	/me ¹ / (mê)	/mă _n ¹ / 「雲」
𠵼	/măj ² / (mây)	眉	/mi ¹ / (mì)	/m ^c _j ¹ / 「お前」…

注：1) 「若」よりも「諾」/nă⁶/ (năc) の省声を声符と考えた方が初頭子音、韻両方の面で合理的である。

2) 現代ベトナム語では単に「携える」の意味。ちなみに「肩で担ぐ」は /vak⁵/ (vác)。

3) 恐らく「經」の誤植。

次いで、第2の利用方法は、かつての複合子音に遡る現代の諸音素 /ɛ/ (tr), /ɜ/ (gi), /ɲ/ (nh), /l/ (l), /ʃ/ (s) のうち、17世紀⁹⁾ にすでにその痕跡を留めない /ʃ/ の変化過程を傍証するものとして字喃を利用する方法である。以下本文にしたがい、一部を例示する [ibid.: 79-80]。

表 4

字喃	字音	声符	漢字音	意味
瀝	/ʃɛk ⁶ / (sach)	歴	/lik ⁶ / (lich)	「清潔な」
迎	/ʃaŋ ¹ / (sang)	郎	/laŋ ¹ / (lang)	「わたる」
𨵿	/ʃaw ¹ / (sao)	牢	/law ¹ / (lao)	「なぜ」…

つまり、下図〈複合子音の融合過程1〉に示すように、現代の音素 /ʃ/ がかつて複合子音 /*kr/ あるいは /*pr/ の段階にあったときの第2要素 /-r/ を声符の初頭子音 /l/ が表示しているとみなすわけである。

〈複合子音の融合過程1〉¹⁰⁾

1. Protoannamite
- | | | | | |
|------------------------|-----------|----------|----------------|-------------|
| | 17c. | 20c. (北) | (中) | (南) |
| * b + l ¹¹⁾ | → bl (bl) | → z (gi) | t/bl ∞ tl (tr) | t (tr) |
| * t + l | → tl (tl) | → c (tr) | t/bl ∞ tl (tr) | t (tr) |
| * m + l | → ml (ml) | → ɲ (nh) | ɲ ∞ l (nh, l) | ɲ/l (nh, l) |
2. Protoannamite
- | | | |
|---------|------|------|
| | 17c. | 20c. |
| * p + r | → pr | |
| * t + r | → | |
| * k + r | → kr | |

第1、第2両方の利用法に関して、まず問題となるのはその大前提となる字喃の示す音韻状況の同時代性である。この点はしばしば指摘されてきたことであるが、Maspéro 自身は以下のように述べている。

- 9) Maspéro のいう Annamite moyen の段階を指し、その基礎資料は Alexandre de Rhodes [1651] である。
 10) Maspéro の再構した変化過程 [Maspéro 1912: 76-88] に忠実に従って作成した図である。複合子音の第2要素が /l/ か /r/ かによって変化過程が2分される。
 11) Maspéro は Protoannamite の段階の複合子音の第1要素を接頭辞 (préfixe) とみなしているが [Maspéro 1912: 79], 今日では一般に、注12ならびに次節に解説する Proto Viet-Muong の段階でさえ、Proto Mon-Khmer 段階の接頭辞、接中辞はすでに生産性を失っていると考えられている [Nguyễn Tài Cẩn 1995: 241-242]。

(阮薦の『家訓歌』は) 確かに陳朝中期のベトナム語が書かれており、これらが判断できるといことは、全体的にその文字体系が今日までそれほど変化を被ってこなかったということになる。

知識人がそれぞれ勝手に自分用の特殊な文字を作ったというほどに、その文字は規範化も固定化もされなかった、などというあまりにも広く行きわたった誤った考えかたをここで議論するつもりはない。…… Ninh Binh の石碑の文字と、17・18世紀の石碑や書物の文字、それに現在の文字とを比較すれば、それらの間にはほとんど差異がなく、これまで指摘された以上に固定性があることが明らかとなる。[*ibid.*: 7, 注1]

この点に関して実際に後で検証してみるが、少なくとも全ての字喃を一律に13世紀の音韻史の資料として利用することは、今日的観点からは許されない。したがって、以上2つの方法で字喃を利用することにより明らかになることは、(1) 現代の単一音素が同系言語との比較により複数音素に遡る事実が傍証され、(2) 更にその複数音素の共存する段階がベトナム語とムオン諸語が分離した後の時代にも設定できるという2点である。ただ、Maspéro が取り上げた第1の例に関しては、確かに Protoannamite (ベトナム漢字音形成前) ならびに Préannamite (ベトナム・ムオン分離前) の段階に $/*t/$ と $/*s/$ の両方を再構成することは可能だが、更にその前の段階¹²⁾ に $/*t/$ を設定するか否か断定が難しい [Nguyễn Tài Cẩn 1995: 85]。よって、全ての語彙が $/*s/ > /t/$ の過程に位置付けられるのか、Maspéro が想定したようにその中の一部は元来 $/*t/$ であったとみなすかという問題が残る。また、現代の $/t/$ が $/*t/$ と $/*s/$ の二音素に遡る状況は、実は Maspéro が Annamite ancien の資料として挙げる『華夷訳語』にもその痕跡が明らかに見られる [Vương Lộc 1989: 4; 1995: 33-34; 陳 1969: 247-250]。現代の単一音素が Proto Viet-Muong の段階で複数音素に遡る傍証として字喃が有用である最も顕著な例は、現代の摩擦音音素 $/v/$ (v) が一方で閉鎖音 $/*p/$, $/*b/$ に遡り、他方で半母音 $/*w/$ に遡るというケースにおいてである。例えば次節で取り上げる漢文=字喃文対訳資料『佛説大報父母恩重經』(15世紀) に記される字喃の場合、前者の例には $/b/$ (b) で対応し、後者には $/v/$ (v) で対応する [清水 1996: 94, 注33]。ただ、この状態は17世紀まで残存しており、Rhodes の辞書の中で前者は o で、後者は u で表記されている [Gregerson 1969: 150-155]。

Maspéro が示した第2の利用法に関しては、第1の場合と同様、 $/s/$ が複合子音であった段階がベトナム・ムオン分離以降にまで下ることを証明する点で重要であるが、やはり上述の例と同様 Annamite ancien の段階にもその痕跡が十分に見られる [Vương Lộc 1989: 9-10; 1995:

12) Maspéro 以降に発見されたムオン諸語で更に古い形態をとどめる Arem, chúrt グループ等の諸言語との比較により再構成される Proto Viet-Muong, あるいは Proto Việt Chúrt (Nguyễn Tài Cẩn [1995] の用語) を指す。詳細は次節を参照。

57-58；陳 1969：241-244]。

以上、Maspéro による字喃の利用法を整理し、それに対して簡単な考察を加えた。たしかに Protoannamite の段階から Annamite moderne (19世紀ベトナム語) の段階の間の空白部分の音韻状況を埋めるという意味で注目されるべき諸特徴が指摘されているが、実際のところいずれの特徴も Annamite ancien もしくは Annamite moyen の段階にまで下り、字喃がその傍証となりえても、積極的貢献をなしえているとはいえない。また、上にも指摘した字喃の13世紀の同時代資料としての価値が疑問視されている事情も、その資料的価値を低下させていることは否めない。

以上を踏まえた上で、次節において、Maspéro 以降に発見・記述されたムオン諸語の音韻体系、ならびに字喃資料の分析を通じて得られた知見に基づき、護城山碑文に記された字喃の音韻特徴の分析を試みるが、その過程で、上で見たような音韻史研究における字喃の消極的利用とは異なる、その積極的利用方法を提示してみたい。

IV 護城山碑にみる字喃の音韻論的分析

Maspéro は以下の各地域ないしグループのムオン諸語を、Préannamite の初頭子音体系再構成の資料として利用した [Maspéro 1912：5]。

1. 北部方言

Thạch Bì	(Hoà Bình)
Vân Mông	(Sơn Tây)
Mỹ Sơn	(Hà Đông)
Nhỏ Quan ¹³⁾	(Ninh Bình)
Nguồn	(Quảng Bình)

2. 中部方言

Ngọc Lặc	(Thanh Hoá)
Như Xuân	(Thanh Hoá)
Lâm La	(Nghệ An)
Làng Lờ	(Nghệ An)
Hạ Sứ	(Nghệ An)

3. 南部方言

Uỷ Lô	(Nghệ An)
Thái Thịnh	(Nghệ An)
Khong Kheng	(Nghệ An)
Hung	(Nghệ An)
Sek	(Quảng Bình)

13) 恐らく Nho Quan の誤り。

1912年以降, Maspéro が言及しなかったムオン諸語が発見, 記述され, その後のベトナム語音韻史に大きな影響を与えた。以下, Trần Trí Dõi [1996] の分類に従いそれらを列挙する。

4. Arem 語 (Quảng Bình)

5. Chú't グループ

Sách (Quảng Bình)¹⁴⁾

Rục (Quảng Bình)

Mây (Quảng Bình)

6. Mã Liềng グループ

Mã Liềng (Quảng Bình, Hà Tĩnh)

Khạ Phụng (Hà Tĩnh)

Pakatan (ラオス, Khammoun, Bolikhamsay)

7. Aheu グループ

Khạ Thavưng (Bolikhamsay)

Khạ Phon-soung (Bolikhamsay)

Sô (タイ, Sakon Nakon)

8. Pọng グループ

Đan Lai-Ly Hà (Nghệ An)

Pọng (Nghệ An)

前者のグループ(1～3:ただし3のSekを除く)と後者のグループ(4～8)の音韻構造上の最大の差異は, 前者の形態素が

$C_1V(C_2)/T$

(C:子音あるいは複合子音, V:母音, T:声調あるいは発声タイプ)

という単音節構造のみを呈するのに対し, 後者はそれに加え,

$(C_0)vC_1V(C_2)/T$

という双音節構造の形態素を有する点である。

以下の議論では, 護城山碑文に見られる人名, 地名を記した字喃が, 碑文建立当時(14世紀)のベトナム語が双音節構造そのもの, あるいはその痕跡を明確に留めていた可能性を示唆していることを主張したい。

それに先立ち, 1912年以降に発見された字喃資料で, 特に本稿の議論にかかわるものとして漢文=字喃文対訳『佛說大報父母恩重經』について言及しておく。この資料には従来知られる

14) Maspéro による分類の南部方言に含まれる Sek が恐らくこれに相当すると思われるが, Trần Trí Dõi [1996] の分類に従い, 再び Chú't グループに含めておく。

字喃資料においてほとんど指摘されなかった字喃の表記法が頻繁に見られる。それは、2文字単位による1形態素の表記である。清水[1996]では、それら諸例の分析を通じて、15世紀のベトナム語における双音節形態素の残存が主張されたが、本稿においてその状況が14世紀にも見られることが確認されたなら、その主張が一部裏付けられることになる。

まず、本文中の字喃の認定基準について言及しておく。一般語彙に関しては数字、度量衡単位、土地の形態等を表わす語彙に限られ、認定はそれほど困難ではない。ただし、漢語起源の語彙でもベトナム語の統語法にしたがって使用されている場合は(例：「主施」の主)、字喃とみなす。次に、問題となる地名、人名を表わす固有名詞に関しては、(1)2文字で表記されており双方が熟語をなさず、あるいは意味的関連性を示さず、(2)第1要素の字音の母音が/a/であるものをここでは字喃と認定することにする。

以上の基準で認定される一般語彙を表記した字喃のリストを表5に示す。

上に引いたMaspéroの言説「……Ninh Bìnhの石碑の文字と、17・18世紀の石碑や書物の文字、それに現在の文字とを比較すれば、それらの間にはほとんど差異がなく、これまで指摘された以上に固定性があることが明らかとなる」をここで検証するために、表5に示された字喃の字形と後世の資料中に見られる字形との比較を試みる。残念ながら人名、地名を表記した字喃は後世の字喃との比定が困難なため、ここでは対象外とする。したがって、表5に挙げた語彙に関して、護城山碑(14c.)と共に15世紀の資料として漢文=字喃文対訳『佛說大報父母恩重經』、17世紀の資料としてMaioricaの著作[Vũ Văn Kính 1992]、そして19世紀の資料として『大南國音字彙』(Huỳnh Tịnh Paulus Của 著, Saigon 刊, 1895~96年)を取り上げ、そこに記された字喃の字形を表6に対照する。¹⁵⁾

表5

	字喃	字音	意味	出現箇所
(1)	所	/t'uə ³ / (thừa)	「村落内小地名」	b.
(2)	涇	/keŋ ¹ / (kênh)	「用水路」	b-1.
(3)	波	/ɓa ¹ / (ba)	「3」	b-1.
(4)	窩/高	/ɓaw ² / (sào)	「(長さ、面積の単位)」	b-1.
(5)	多馬	/t'a ¹ ma ¹ / (tha ma)	「墓地」	b-2.
(6)	沒	/mot ⁶ / (môt)	「1」	e.
(7)	哈	/haɣ ¹ / (hai)	「2」	k.
(8)	糝	/tam ⁵ / (tám)	「8」	l.
(9)	主	/cu ³ / (chủ)	「ぬし」	r-2.
(10)	廊	/laŋ ² / (làng)	「ムラ」	s.
(11)	伴	/ɓan ⁶ / (bạn)	「畦道」	s-1.

15) Maspéro 自身は阮薦『家訓歌』を現存する最古の字喃表記された書物としているが[Maspéro 1912: 7, 注1], 現在その阮薦の著作としての真偽が問われているので、ここでは取り上げない。

表 6

	14c.	15c.	17c.	19c.
(1)	所	所	所	
(2)	涇			涇
(3)	波 ^注	巴	波 / 巴 / 𠂔	𠂔
(4)	篙 / 高			篙
(5)	多馬			
(6)	沒	没 / 沒	没 / 沒 / 蔑	沒
(7)	哈	哈	哈 / 𠂔	𠂔
(8)	糝	糝 / 參	糝	糝
(9)	主		主	主
(10)	廊	廊	廊	廊
(11)	伴			畔

注：第Ⅰ節に紹介した碑文Ⅴ「施濟病田碑」に数詞「3」を表記する字喃として「巴」が一回出現する。

表 8

(a)	婀旱	/2a ¹ han ⁶ /
	阿朗	/2a ¹ laŋ ⁴ /
	阿空	/2a ¹ xoŋ ¹ /
	阿𠂔	/2a ¹ cəm ¹ /
(b)	箇尼	/ka ⁵ ni ¹ /
	个尼	/ka ⁵ ni ¹ /
	箇支	/ka ⁵ ci ¹ /
	箇株	/ka ⁵ cəw ¹ /
	个𠂔	/ka ⁵ đam ¹ /
(c)	可羅	/xa ³ la ¹ /
	可磊	/xa ³ loj ⁴ /
(d)	多稼	/đa ¹ ʒa ⁵ /
	𠂔尾	/đa ² vi ⁴ /
(e1)	波来	/6a ¹ laj ¹ /
	婆札	/6a ² le ⁴ /
(e2)	婆俱	/6a ² kəw ¹ /
	婆勾	/6a ² kəw ¹ /
(f)	麻札	/ma ¹ le ⁴ /

表 7

<人名>		
字喃	字音	出現箇所
婀旱	/2a ¹ han ⁶ / (a hən)	t.
阿朗	/2a ¹ laŋ ⁴ / (a lāng)	y.
箇尼	/ka ⁵ ni ¹ / (cá ni)	v-1.
个尼	/ka ⁵ ni ¹ / (cá ni)	x.
箇支	/ka ⁵ ci ¹ / (cá chi)	v-2.
箇株	/ka ⁵ cəw ¹ / (cá châu)	v.
可羅	/xa ³ la ¹ / (khả la)	r-2.
可磊	/xa ³ loj ⁴ / (khả lỗi)	y.
波来	/6a ¹ laj ¹ / (ba lai)	e.
婆札	/6a ² le ⁴ / (bà lễ)	l.
麻札	/ma ¹ le ⁴ / (ma lễ)	m.
<地名>		
阿空	/2a ¹ xoŋ ¹ / (a không)	m. (2回), r.
阿𠂔	/2a ¹ cəm ¹ / (a chām)	j.
个𠂔	/ka ⁵ đam ¹ / (cá đām)	q.
多稼	/đa ¹ ʒa ⁵ / (đa giá)	y.
𠂔尾	/đa ² vi ⁴ / (đa vĩ)	s.
婆俱	/6a ² kəw ¹ / (bà câu)	k., l., n.
婆勾	/6a ² kəw ¹ / (bà câu)	o.

Maspéro の言説通り，各語彙を表記する字喃の字形はほぼ単一であり，すくなくともその表音要素は一部を除いて一定している。しかし，これら11例のみの比較に基づき字喃の文字体系全体の固定性を主張することには若干の抵抗を感じる。

次いで，上の基準に従って固有名詞を表記する字喃を抽出し，分析を試みる。まず，諸例を人名，地名に分類して表7に列挙する。

Maspéro は「村落，部落名等を記すために約20の字喃が使用されている」[Maspéro 1912: 7, 注1]と記すが，それが個々の文字の数ではなく，示される固有名詞の数であると解釈するならば，上の人名，地名の数を合計した18という数はMaspéroの記述にほぼ合致する。

次いで、表7に挙げた地名、人名を表記する字喃を、今その第1要素の字音に基づいて表8のように再分類する。

ここで、これらの字喃が初頭複合子音あるいは双音節構造を表示していることを主張するために、Nguyễn Tài Cẩn [1995] の再構による Proto Viet-Muong の音節構造の概略を示しておく。音節構造そのものは上に示した4～8のムオン諸方言と同じく双音節を含むが、個々の構成要素（特に初頭子音）のメンバーは以下の通りである。

1. 双音節 $((C_0) vC_1V (C_2))^{16)}$ の場合

- a. C_0 の主要メンバー： $/*p/$, $/*t/$, $/*c/$, $/*k/$, $/*s/$, およびゼロ $/*\emptyset/$
 b. v ： C_0 がゼロの場合 $/*a/$, それ以外の場合非弁別的 $/*a/$

2. 単音節 $(C_1V (C_2))$ で C_1 が複合子音の場合

- a. 複合子音第1要素の主要メンバー： $/*p/$, $/*t/$, $/*c/$, $/*k/$, $/*s/$, $/*h/$,
 $/*m/$ 等
 b. 複合子音第2要素の主要メンバー： $/*r/$, $/*l/$

表8に示した字喃の第1要素が双音節構造内の前音節 $((C_0) v)$ あるいは単音節の初頭子音 (C_1) が複合子音である場合のその第1要素を表記していると仮定するならば、それらの字喃に上の Proto Viet-Muong の再構音をあてはめると表9となる。

表9

グループ (a)	婀, 阿	$/*a/$
グループ (b)	箇, 个	$/*kə/$
グループ (c)	可	$/*k'ə/$ 注
グループ (d)	多, 佗	$/*tə/$
グループ (e1)	波, 婆	$/*pə/ (> /*bə/)$
グループ (e2)	婆	$/*pə/$
グループ (f)	麻	$/*mə/$

注：Nguyễn Tài Cẩn [1995] による主な構成要素のメンバーには見られないが、以下（表10の注釈、注19）に示すように、複合子音の第1要素として音声的に有気要素が存在した可能性が指摘されている。

表10

$/*bl-/ (e1)$	$/*k'r-/$ 注 (c)
$/*ml-/ (f)$	

注：漢字音に基づき選択される字喃の声符に $/l/$ と $/r/$ を積極的に判別する方法はない。しかし、ここで第2要素を $/r/$ と解釈するのは、軟口蓋系列の子音（特に有気閉鎖音 $/k'/$ ）が第2要素 $/l/$ と複合子音をなすことを積極的に提案する根拠がないからである。『佛說大報父母恩重經』に見える字喃の場合、第1要素の初頭子音が $/k'/$ の場合は確実に現代の音素 $/ʃ/$ に対応している。したがって、本例もそれに準じて $/*k'r/ > /ʃ/$ の例と解釈しておく。

表11

$/*pə/$	$/*tə/$	$/*kə/$	$/*a/$
---------	---------	---------	--------

16) Nguyễn Tài Cẩn [1995] は Proto Viet-Muong の段階に声調あるいは発声タイプの存在を積極的には想定していないので、音節構造そのものは上記の「/T」の要素を省略した形を示す。

表 12

前音節	護城山碑文	佛説大報父母恩重經
/*pə/	婆	波, 巴
/*tə/	多, 佗	多
/*cə/		舍
/*kə/	箇, 个	古, 巨 ¹⁾
/*sə/		司 ²⁾
/*a/	婀, 阿	阿

注：1) 「古」「巨」の字音はそれぞれ /ko³/, /ku⁶/ であるが、
/a/ 以外の母音の音節が前音節の表示に使用されている
のは、それに続く主音節 (C₁V (C₂)/T) の母音がそれ
ぞれ /o/, /u/ であることから、元来音声的に中立な
schwa /ə/ が主音節の母音に同化した状況を純粹に表記
しようとしたためと推測される。

2) 本文 n. に見える隊名「司布」もこの例に含まれるかも
しれないが、今は碑文訳注12に示したような職能的意味
の可能性を考慮し、ひとまず字喃と認定しないでおく。

表 13

複合子音第 1 要素	護城山碑文	佛説大報父母恩重經
/*p-/ (> /*b-/)	波, 婆	波, 婆, 巴
/*k'-/	可	可
/*m-/	麻	麻

グループ (c), グループ (f), およびグループ (e1) は第 2 要素が /l/ であることから、それが複合子音の第 2 要素である可能性が高い。それらをまとめると表10となる。

したがって、表 9 のそれ以外の字喃が双音節構造の前音節を表示しているという可能性が高い。表11にそれらを列挙しておく。

Nguyễn Tài Cẩn [ibid.] の再構成にしたがうならば、表11のリスト以外に、/*cə/ および /*sə/ の出現が期待されるが、残念ながら本碑文には見出しされない。ところが、上に言及した漢文=字喃文対訳『佛説大報父母恩重經』に記された字喃からはそれら全てのパターンが抽出可能である [清水 1996: 101]。今、両資料に見られる前音節を表示する字喃を表12に列挙し対照する。

また、表10に示した複合子音が、同様に『佛説大報父母恩重經』においても再構可能である。表13にその第 1 要素を表示した字喃を対照して示しておく。

以上の分析を通じて、これらの字喃が Proto Viet-Muong の音節構造の諸条件に合致していることが確認されたと考える。したがって、15世紀同様14世紀におけるベトナム語にも双音節形態素がやはり存在したことを主張する。

V 結 論

ここで第 III 節に述べた字喃の積極的利用方法について考察する。第 IV 節に示した分析手順も、結局 Proto Viet-Muong の特徴がベト・ムオンの分離以降も引き継がれていたという事実を証明した点において、Maspéro による字喃利用方法と何らかわるところはない。しかし、その特徴が Annamite ancien あるいは Annamite moyen の段階まで残存しなかったがために、他の文献資料では証明しえなかった点が Maspéro の場合と大きく異なる点である。

更にもう一点、本碑文に見る字喃の積極的利用法を提示する。ここで対象となるのは、表10に示した複合子音を表示する字喃である。表10では音韻論的表示を施したので、単に2つの子音が並んだ形で表記したが、実際の音声的特徴としては、それら2つの子音間に非弁別的 /ə/ 母音が介在していた可能性が考えられる。その根拠となる資料は、護城山碑と『佛説大報父母恩重經』に見る以下の字喃群である。

表 14

字喃	字音	声符	漢字音	意味
(a) 把	/cá ³ / (trà)	把	/bá ³ / (bà)	「報いる」
(b) 徒	/cə ² / (trò)	徒	/dɔ ² / (đò)	「悪ふざけ」
紉	/cəj ⁵ / (trói)	对	/dɔj ⁵ / (đói)	「縛る」
遁	/cən ⁵ / (trôn)	遁	/dɔn ⁵ / (độn)	「逃げる」
(c) 工	/cəŋ ¹ / (trong)	工	/kəŋ ¹ / (công)	「中」
高, 篙	/jəw ² / (sào)	高	/kəw ¹ / (cao)	「(長さ, 面積の単位)」

(以上『佛説大報父母恩重經』)

(以上護城山碑)

恐らく、表14のグループ (a) は複合子音 /*bl-/ の第1要素を、グループ (b) は /*tl-/ の第1要素を、グループ (c) は /*kl-/¹⁷⁾ および /*kr-/ の第1要素を表示したものと考えられる。これら諸例に共通する点は、複合子音を表示するのに表8の諸例とは異なり、単一文字を使用していることである。

同一資料内に表8のような例と表14のような例が共存するということは、字喃表記者が何らかの理由によりそれらを意識的にせよ無意識的にせよ区別していた可能性がある。ここでは、表8の諸例は複合子音間に /ə/ 母音が介在する場合、表14の諸例はそれが介在しない場合を表示したものと仮定する。

この仮定に従うならば、音声面に留意しつつ、先の〈複合子音の融合過程1〉を以下のように拡大表示することができる。

17) 「工」/cəŋ¹/ は17世紀の /tloŋ¹/ に遡るので、初頭子音の対応は例外的である。

〈複合子音の融合過程2〉¹⁸⁾

- | | | | | |
|------------------|-------------------|------------------|-------|----------------|
| 1. Protoannamite | 14c. | 15c. | 17c. | 20c. |
| *b- + l- | → /bl-/ [bəl-] | → /bl-/ [b(ə)l-] | → bl- | → z/ bl/ tl/ t |
| *t- + l- | → /tl-/ [tl-] (?) | → /tl-/ [tl-] | → tl- | → t/ bl/tl |
| *m- + l- | → /ml-/ [məl-] | → /ml-/ [məl-] | → ml- | → p/l |
-
- | | | | | |
|------------------|------|----------------------------------|-------------------|----------------|
| 2. Protoannamite | 14c. | 15c. | 17c. | 20c. |
| *p- + r- | ↓ | → /kr-/ [k'(ə)r-] ¹⁹⁾ | → /kr-/ [k'(ə)r-] | → kʂ → ʂ- → ʃ- |
| *t- + r- | | | | |
| *k- + r- | | | | |

お わ り に

以上、護城山碑文に見られる字喃の音韻論的分析を通して、主に、

(1) 地名、人名を表記する2文字表記の字喃の第1要素が当時まだその痕跡が明らかに認められた双音節形態素の存在を示唆すること、

(2) 同じく2文字表記の字喃の第2要素が /l/ を初頭子音とする場合、それらは複合子音の個々の要素を表記している可能性が高く、第1要素が独立した1文字をなすことから、一部の語彙において、複合子音の各子音間に音声的には非弁別的 /ə/ が介在していた可能性があること、

の2点が明らかとなった。

今後、本稿の主張を支持するような同種の史料が更に発見されることが期待される。²⁰⁾

参 考 文 献

日本語文献

- 陳 荆和. 1969. 『安南訳語の研究』 香港：著者刊(原載、『史學』39(3,4); 40(1); 41(1,2,3))
- 桃木至朗. 1983. 「陳朝期ベトナムの路制に関する基礎的研究」『史林』66(5): 50-82.
- . 1988. 「ベトナム李朝の地方行政単位と地方統治者」『東南アジア研究』26(3): 241-265.
- . 1992. 「10-15世紀ベトナム国家の『南』と『西』」『東洋史研究』51(3): 158-191.
- 清水政明. 1996. 「漢文＝字喃文対訳『佛説大報父母恩重經』に見る字喃について」『人間・環境学』5: 83-104.

18) 実際、『佛説大報父母恩重經』の諸例から帰納される複合子音のパターンは更に多岐にわたるが、ここでは、MaspéroによるProtoannamiteのパターンを尊重しつつ、簡潔を期して代表的なパターンのみを整理し示しておく。

19) /kr/ から /ks/ への中間段階として [k'r] という音声状況を設定すべきとする議論があるが[Ferlus 1975: 45], ここに示した字喃が示す状況はまさにこの主張を支持するものである。

20) 碑文を採すほか、陳朝期に成立した文献史料も見直す必要がある。たとえば『大越史略』に基づいて桃木[1988: 245-246]が作成した李朝期地名リストには、麻浪阿杲(社) ma lang a cảo /ma¹ laŋ¹ 2a¹ kaw³/ 个屢(邑) cá lū /ka⁵ lu⁴/ など、明らかに2文字表記の字喃と見られる地名が散見する。これらの再検討は別の機会に行う予定である。

外国語文献

- de Rhodes, Alexandre. 1651. *Dictionarium annamiticum, lusitanum, et latinum*. Rome.
- Ferlus, Michel. 1975. Vietnamien et Proto Viet-Muong. *Asie du Sud-Est et Monde Insulindien* 6(4) : 21-55.
- Gergerson, Kenneth J. 1969. A Study of Middle Vietnamese Phonology. *Bulletin de la Société des Études Indochinoises* 44(2) : 131-193.
- Ha Van Tan. 1991. Inscriptions from the 10th to 14th Centuries Recently Discovered in Viet Nam. Paper presented at Symposium on Vietnamese History, Southeast Asian Summer Institute, Cornell University, 19-21 July, 1991.
- Hoàng Thị Châu. 1989. *Tiếng Việt trên các miền đất nước (phương ngữ học)*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội.
- Lê Thị Liên. 1989. Những tấm bia đá thời Trần ở núi Non Nước (thị xã Ninh Bình-Hà Nam Ninh). Luận văn tốt nghiệp chuyên ngành khảo cổ học (khóa 29- Năm học: 1984-1989), Trường Đại học Tổng hợp Hà Nội.
- . 1990. Nhóm bia đá thời Trần trên núi Non Nước ở thị xã Ninh Bình (Hà Nam Ninh). Trong *Những phát hiện mới về Khảo cổ học 1989*, tr. 141-142. Hà Nội: Viện Khảo cổ học.
- Maspéro, Henri. 1912. Études sur la phonétique historique de la langue annamite. Les initiales. *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 12 : 1-127.
- Ngô Đức Thọ. 1986. Bước đầu nghiên cứu chữ huy đời Trần. *Nghiên cứu Hán Nôm* 1986(1) : 17-32.
- . 1997a. *Chữ huy Việt Nam qua các triều đại*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Văn hoá.
- . 1997b. Chữ 'Nam' viết kiếng huy và vấn đề niên đại của chuông Vân Bản. *Tạp chí Hán Nôm* 1997(2) : 18-22.
- Nguyễn Tài Cẩn. 1995. *Giáo trình lịch sử ngữ âm tiếng Việt (sơ thảo)*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Giáo dục.
- Trần Trí Dồi. 1996. Các ngôn ngữ thành phần của nhóm Việt-Mường. *Tạp chí Ngôn Ngữ* 1996(3) : 28-34.
- Trương Hữu Quýnh. 1982. *Chế độ ruộng đất ở Việt Nam thế kỷ XI-XVIII, tập I: thế kỷ XI-XV*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội.
- Vũ Văn Kính. 1992. *Bảng tra chữ nôm thế kỷ XVII (qua tác phẩm của MAIORICA)*. Nhà xuất bản thành phố Hồ Chí Minh.
- Vương Lộc. 1989. Hệ thống âm đầu tiếng Việt thế kỷ XV-XVI qua cú liệu cuốn 'An Nam Dịch Ngữ'. *Tạp chí Ngôn ngữ* 1989(1,2) : 1-12.
- . 1995. *An Nam Dịch Ngữ (giới thiệu và chú giải)*. Hà Nội-Đà Nẵng: Nhà Xuất Bản Đà Nẵng-Trung Tâm Từ Điển Học.